
イバラギ

sama

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イバラギ

【Nコード】

N1778X

【作者名】

sama

【あらすじ】

元氣いっぱいいの妹と、車イスで過ごす兄。不思議な兄妹の周りで起こる出来事。

それは、私にとって幻なんかじゃなかったんだよ…？

私が住む街にある国立博物館は、今大盛況。

科学の力！つて言つて、特別展として、たくさんの科学技術の賜物がやってきた。

すごいよね。

宇宙に行った衛星や、進歩を続けるロボット達。今や会話が可能になっている。

でもまだまだ機械的。それが当たり前なもの。

人間の代わりに動いてくれる便利さ。

生活を日々進化させる。人類をさらに進歩させる。

歴史に残るモノが、数多くこの博物館へやってきた。

みんな興奮してる。

そんな中、一際みんなが見たがる存在があった。

特別展にも関わらず、さらに特別な部屋に用意されている。

他よりも値段が高い券が必要。それが無ければ入れない部屋。

小さな部屋のガラスケースの中。

ソファがあり、そこに座る小さな二つの存在。

手を握り合い、寄り添うように眠っている兄と妹。

どこからどうみても人間だった。ただ目を閉じて、すやすやと眠るような姿は、なんとも微笑ましい。

『幻想』の人形。

出会い(1)(前書き)

あっという間の初対面

出会い(1)

この街、あまり好きじゃない。

昼は喧騒が。

夜にはネオンの光が。

「はあ……」

「どうしたの？レイちゃん体調悪い？」

「ううん。行ってきます」

学校嫌い……。

赤いランドセル、去年はピカピカだったのに。

今や擦り傷だらけ。

「よお！加藤じゃま！」

「あつ」

痛いな……。

「もお……」

「大丈夫？」

「うん。ありがとう」

あれ？誰？

「乱暴だね！後ろから押すなんて！」

「あ、あの」

「お名前は？」

「え？えっと、加藤レイ」

「レイちゃんね！私は茨木つぶ！よろしくね！」

元気いっぱいだあ。

「つぶ…ちゃん？」

きれいな金色の髪。そして大きな空色の眼。

外国人？かな…。

「あ、レイちゃん二年生？私ね、今日からこの小学校なの。同じクラスだったらいいね！」

またね！と行って、学校へ走っていった。

あっという間だった。

これが、私とつぶちゃんの初めての出会いだった。

出会い(2)(前書き)

始業式

出会い(2)

今日から二年生になる。

クラス替えはない。

クラスメートは変わらない。

だから女子も男子も変わらない。

「おはよう」

「おはよー」

あいさつはする。

あいさつはするの。

「おはよー加藤さん」

でも名前じゃない。

「おはよう。竹下さん」

みんな名前や愛称で呼び合ってるのになあ。

思い切って呼んだらいいのに。

むー…。

ランドセルにつけているストラップ。

綺麗なガラス玉が3つ繋がってる。

大好きなおじさんからの土産。

だからコレを見てると気持ちげ元気になる。
なんだか勇気づけられる。

おじさんにまた会いたいなあ。家に来ないかな。

ママ嫌いだもん…。

あ、帰ったら今日塾だ…。

宿題、してないや…。

一人考えすぎていたら、いつの間にか先生がやってきた。

「はい！みんなー。これから始業式だから、さ、廊下に並んでー並んでー」

背の順で移動する。

私は前から三番目。

これから始業式。このクラスの先生が発表される。

大切なこと。

優しい先生だったらいいな。

体育館へ向かう中、そんなことばかり心配してた。

そういえば、つぶちゃんはいつ来るのかなあ？

つぶって珍しい名前。

まだ転校生の話、聞いてないけど。

もし同じクラスだったら、仲良くなれるかな。

また会いたいな…。

出会い(3)

つぶちゃんは、同じクラスだった。

「茨木つぶです！これからよろしくお願いしまーす！」

元気なあいさつだった。

それに加えて満点の笑顔。

かわいいなあ。

「お！茨木さんは元気がいいね」

「うん！」

「みんなも、これから仲良くね！」

担任の先生は、若い男の先生だった。

山本先生。

「それじゃあ、質問タイム！茨木さんに何か聞いてみたいこととかないかな？」

すると、手がポンポンって拳がる。

「はい！」

「はい竹下さん」

「あ、えっと、茨木さんはハーフですか？」

「うん！あ、でもお母さんいないからどこの国が分かんない！お父さんは日本人だよ」

それから、

「はい篠田君」

「兄弟はいますか？」

「ううん。一人っ子だよ」

「つぶつて珍しいね！」

「私もそう思う〜」

時々聞いていいのかわいのか分からない質問もあったけど、あつと
いう間に自己紹介は終わった。

「じゃあ、茨木さんは、あそこの空いている席ね」

「はい」

「じゃあ、一時間目の準備をしていてね」

そう言って、山本先生は職員室へ走っていった。

つぶちゃんの席は、後ろの余り席。

隣は、私が苦手な男子の立川くんだった。

「あー！」

つぶちゃんはやっぱり覚えてたんだ。

「あなた朝の危ない男の子でしょ？ケガしたら大変だったんだからね！今度からしないでよ？」

「はあ？」

もちろんの反応だった。

でも、

「じゃあこれからよろしくね！」

あれ？

すごい。

立川くんもさらに顔をポカンとさせていた。

「茨木さん！よろしくね！」

「私も。お友だちだね！つぶちゃんって呼んでいい？」

「どこに住んでんの？」

「今度遊ぼー」

みんなに話しかけられて、つぶちゃんはにこにこしていた。

「つぶ…ちゃん…」

輪に入れない。

どうしよう。

あ！小さい声なんかじゃダメ！

でも…。

「あーレイちゃんだあ。同じクラスだったね！」

「えー！あつ、うんっ」

あれ？

もしかしてさっきの声、聞こえたのかな？

つぶちゃんは、こっちにやってきた。

周りにいた子たちも一緒にやって来た。

「茨木さん、加藤さんと知り合いだったの？」

「うんっ。この街に越してきてね、最初のお友達だよ！」

「最初の？」

「そう！ねーレイちゃん」

か、顔が赤くなってるかも…。

「あ、加藤さん顔が真っ赤だよ」

「うっ…うん」

最初の…お友達。

嬉しかった。

明良おじさん(1)(前書き)

主要人物その3!

明良おじさん(1)

「ただいまあ」

「おかえりなさい」

お母さんは、仕事中美たいたった。

おじやまかなあ。

「お母さん。今日ね、私のクラスにね」

「あゝ、ごめんねレイちゃん。後で聞くから、今は話しかけないで」

「あ…、うん。ごめんなさい…」

やっぱりおじやまかなあ。

お母さんは、お家でパソコンと睨めっこ。

お仕事は忙しい。

お母さんは疲れてる。

ピンポン。

「んー？誰かしら。レイちゃん、代わりに出てくれるっ？」

「うん分かった。はい」

インターホンの前で返事をした。

『開けてー。入れてー』

ん？

「ん？」

誰だろ。

「誰？」

お母さんも気になったみたいだけど。

「えっと、分からない。男の人」

するとインターホンの向こうから声がまた聞こえた。

『あ、レイ？明良おじさんだよー。開けてー』

あ！

「お母さん！明良おじさんだ！」

「ええ！？？」

玄関へ行きドアを開ければ、おじさんが立っていた。

「お〜！レイ。おっきくなったか？わーい」

「わーい」

明良おじさんが来た！いっぱい遊んでくれるの。

「たかいたかーい」

「たかーい」

「チュツしてやる〜」

「キヤ〜。あははっ」

おじさんと楽しんでたら、お母さんが呆れたようにやってきた。

「ちよつとちよつと。玄関で遊ばないの。」

あなたも何の用事？急に来るなんて。困るじゃないの。事前に連絡してよ」

「まあまあ姉ちゃん。ちよつと近くに仕事があったさ、そのついで。だってレイにも会いたかったの〜」

「…その喋り方止めて。はあ。ま、上がって？お茶くらい出すわよ」

「あはは。どうもどうも」

おじさんは、お母さんの弟で、性格は真反対、なのかなあ。

「レイ、軽いなあ。背の順前の方だろ」

「うん」

「小柄が可愛いから、背は目指して155センチまでな」

「変なことレイに教えないでよ」

お母さんがお茶をおじさんの前に置きながら言った。

私はおじさんの膝の上に乗せられていた。

おじさんは刑事さん。かつこいいなあ。

「あ、あのね、今日ね、私のクラスに転校生が来たの」

私は今日の出来事を話した。

「ほお。仲良くなったか？」

…あれ？

私仲良くなったのかな。

つぶちやんと。

「ん〜。たぶん」

「なんじゃそりゃ。まあ、初日だもんな。いやいや！明日もアタックだレイ！」

…。

「うん…ん？」

「ああ、そうだよ。アプローチさ！」

アタ…ック？アプローチ…？

明良おじさん(2) (前書き)

明良おじさんの仕事。

明良おじさん(2)

レイに会いに来る数時間前 -

「どこに?」

俺、芹沢明良は、でっかい屋敷を見上げていた。

「立派な家だよな。最近越してきた家族がいるらしいんだ」

「ほお」

一緒にいるのは山原さん。一つ上の先輩だ。

「でもな芹沢。ご近所さんいわく、出入りしてるの見たのは、小学二年生くらいの女の子だけなんだとさ。夜の間越してきたらしいから、家主がどんな奴か知らないんだと」

ほお。

「変な話だな」

女の子だけか。

「ここに居る可能性もあるってことか」

「だとしたら、あんな古いぼれに娘がいるってことか」

科学研究所からの搜索願。

失踪したのは、茨木零司。

写真を見せてはもらったが、まあ、若くはない。

「お前な」

隣では呆れた顔をした山原さん。

まあ、とりあえず。

「押すぞ？」

「ああ」

ピンポーン。

「…」

ピンポーン。ピンポーン

「…」

反応はない。

「留守か？」

「居留守かもな」

あやしいな。

「はあ。芹沢。署に戻る。ここは一旦、お預けだ。急ぐわけでもない」

「ん〜。まあそうだけど」

居留守か、留守か。

もし、小二くらいの子がいるのなら、学校はもうすぐ終わるか。終わるか？

「ほら、行くぞ」

ん〜。

「はあ。あ！先帰ってくれ。俺寄る所あるぞ」

「そうか」

小二なら、レイと同年か。

レイは帰ってきてるかな〜。

もし会えたら、小二たちは帰宅。

この女の子も帰って来るはずか。

後でまた来よう。

山原さんいないケド。

明良おじさん(2) (後書き)

明良さんは24〜25歳くらいと考えてます。
若いでしょ^^

行方知らずな男(前書き)

読みやすくなってるはず。
間隔あげました^^

行方知らずな男

キィ…。キィ…。

家の中を、軋む音が響く。

結局、あの後あの家にまた行ってみたが、誰も出てこなかった。

「くっそ。絶対居留守だ」

俺は、気になってしょうがなかった。

よく見たら、表札に名前がないじゃないか。

「…」

ピンポーン。

…。

「ですよねー」

はぁー、帰らじ。

「あー、こちらのお宅に何かご用ですか？」

「あ、あ！すみません」

ちょうど隣の家から、買い物へ行くのだろう主婦が話しかけてきた。

だよなあ。

人の家の前でずっといちゃ。

「あの」

聞いてみようか。

「はい？」

えっと。

「あの、あなたの家のお隣さん、見たことがあります？」

「ああ、お隣さんねえ。朝に女の子が出るのはいつも見てるわよ？」

ほお。

「女の子ですか？女の子以外は？」

「そうねえ。いつもあいさつは交わすけど…、それも女の子だけねえ。すごくかわいいの」

すごくかわいいのね。

それは別にいい…。

「はあ」

「ハーフなのかしら。お人形さんみたいでねえ」

「そうですか」

やっぱり女の子だけなのか？

「あ！そういえば」

主婦さんは何か思い出したようだった。

「はい！何かまだ」

「たぶんお兄さんかしら。車椅子の男の子が確か一緒にいたのを一度見たわよ」

「男の子…ですか？」

「ええ。髪の色も同じだったし、あ、顔は見てないんだけどね？兄
妹かしら」

子供が二人…？

「あの、親御さんは？」

「いいえ。一度も」

子供以外、見てないらしい。

「そうですか」

「ずっと家でお世話とかなんじゃないかしら。その男の子も一度きりで、はたまた親御さんなんて見てないもの」

お世話か。

んー。

「もついい？買い物行かなきゃ」

「あ、はい。ありがとうございました」

いえいえと言って、別れた。

車椅子か。

足が不自由な子がいたのなら、その子につきつきり…？

いやいや、外に散歩くらい。

ていうか学校行かせてないのか？

自宅学習？

だとしても、とにかく茨木博士はどこにいるんだ？

この家に住んでるのか？

もしかして二人の子供って、茨木博士の子なのか？

今も、家の中にいるのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1778x/>

イバラギ

2011年12月9日18時59分発行